

《議 題》

- |  |          |
|--|----------|
| (1) 観光及び空港に関する調査                               | 【所管事務調査】 |
| (2) 地元企業の活性化及び産業間連携に関する調査                      | 【所管事務調査】 |
| (3) 農林業及び畜産業の振興に関する調査                          | 【所管事務調査】 |
| (4) 西3・9周辺地区第一種市街地再開発事業について                    | 【理事者報告】  |
| (5) 「帯広市バイオマス活用推進計画」及び「十勝バイオマス産業都市構想」の中間評価について | 【理事者報告】  |
| (6) 農産物の生育状況について                               | 【理事者報告】  |
| (7) UIJターン促進事業について                             | 【質問通告】   |

《当該委員会における質疑内容（岡坂忠志）》

**1 とかちマルシェについて**

Q1 とかちマルシェは、昨年、9万8千人を超える来場があったと聞いている。十勝を代表する食の一大イベントとなり、今年も多く来場者が見込まれると思うが、これまでの来場者数の推移と、今年度の概要について伺う。

A1 駅南に会場を拡大した平成27年度以降のとかちマルシェの来場者は、平成27年度が80,000人、平成28年度が74,000人、前回の平成29年度は98,000人となっている。

また、今年度の概要については、8月31日（金）から9月2日（日）の日程で、会場を帯広駅北側広場と、駅南側広場、とかちプラザ、とかちプラザ隣の南公園にて開催する。

実施主体としては、帯広商工会議所と帯広市がそれぞれ中心となる2つの実行委員会で実施するもので、帯広駅北側広場50店と、駅南側広場84店で過去最大の合計134店の出店数（昨年130店）で開催する。

Q2 毎年来場者数が増加している中、年々会場が混雑し、飲食するテーブルや椅子などが恒常的に足りないように見受けられる。今年度は何か対策を講じているのか。

A2 今年度については、駅北会場の西側に飲食スペースを新設するほか、駅南ととかちプラザ間の道路を開催時間中に封鎖し、歩行者天国化することで、来場者の円滑な動線を確保するほか、そのスペースにテーブルと椅子を設置する。こうした対策を講じることで、来場者に快適にマルシェを楽しんでいただき、滞在時間の延長につなげたいと考えている。

Q3 一番頭を悩ます問題は駐車場対策だと思うが、迷惑駐車など周辺の対策について伺う。

A3 昨年同様、広報おびひろ、とかちマルシェHPなどにより公共交通機関の利用を呼びかけるとともに、帯広競馬場南側を臨時駐車場とした無料シャトルバスの運行、市役所駐車場の開放、市内中心部の指定駐車場の30分無料券の配布のほか、今年度初めて路線バスでの来場者については復路のバス無料乗車券の配布を行う。

既に、近隣の施設や住民に対して駐車場対策等について説明を終えており、開催についてご理解いただいているところ。

Q4 今後の規模拡大等の方向性、どのように考えているのかについて伺う。

- A 4 今後はイベントの認知がさらに進むなどにより、来場者数の増加が予想されることから、JR帯広駅周辺という中心市街地で開催するイベントとして、近隣の施設や住民の皆様にご迷惑を掛けまいよう更なる対策を講じながら、持続可能なイベントとし、将来的には道東を代表する食のイベントを目指していきたいと考えているところ。

## **2 十勝アウトドアブランディング事業について**

**Q 1 昨年までの取り組みとそこから見えた課題について伺う。**

- A 1 デスティネーション十勝における取り組み状況について、これまで十勝管内のキャンプ場等のアウトドアコンテンツの情報収集を進めたほか、アウトドアにかかる人材育成やサービスにおける先進地の調査、十勝に対するアウトドア需要を探るための市場調査なども行ってきた。

昨年度については、アウトドアを中心とした滞在型観光に着目し、冬場の厳しい気候条件を逆手に取り、十勝でしか体験できない冬のグランピング及び熱気球や犬ぞりなどのアクティビティの可能性を検証すべく、冬季間に地元のアウトドアガイドやレストラン、農家、2次交通事業者らと連携し、道内旅行関係者を招聘したモニターツアーを実施したところ。

実施後の検証結果によると、アクティビティの内容や価格設定などまだまだ課題となる点があることから、今後も関係者と内容を検討していくものと伺っている。

**Q 2 今年度の取り組みについて伺う。**

- A 2 旅行商品が販売できる資格を取得し、本格的にグランピングなど旅行商品を販売するほか、キャンプギアのレンタル、バーベキューセットやキャンプギアなどの物販事業を行う。このほか、大樹町で実施したロケット打ち上げの見学会上の設えや上士幌町の牧場でのくつろぎ空間など、屋外イベントなどの協力や提案を行っている。

**Q 3 十勝アウトドア観光会議の役割と観光庁へのDMO申請のスケジュールについて伺う。**

- A 3 十勝アウトドア観光会議は、地域の合意に基づいたアウトドア観光を進めていくため、十勝管内の自治体、観光協会、アウトドア事業者などで構成するもの。事務局をデスティネーション十勝が担い、これまでアウトドアガイドなどとの意見交換を行ってきたところ。今後、構成団体に対して十勝アウトドアブランディング事業への参画の確認を進め、この秋を目途に観光庁へDMO候補法人の登録申請を行う予定。

**Q 4 今後の自走化に向けた方向性について伺う。**

- A 4 今年度から本格的に取り組んでいる、グランピングなどの旅行事業、レンタル事業、物販事業などを中心に、国の地方創生推進交付金が終了する平成32年度までには、管内の事業者や自治体から期待される存在になるような事業展開を行い、黒字化を目指すもの。

## **3 西3・9周辺地区第一種市街地再開発事業について**

- Q 1 当初4年計画であったものが5年間に延びることにより、普通に考えると現場費用や人件費などが増加し、事業費は膨らむと思う。そこで確認の意味で改めて伺うが、今回のスケジュール変更によって、本当に事業費や補助金は増加しないのか。

A 1 工事期間が延びることにより、一般的には仮設費や現場管理費などが増加することになる。この点について、施行者に確認したところ、人件費については期間が延びる分に合わせて必要な人工の調整を行うことで対応ができるものであり、仮設費等については増額となるが、諸経費等他の経費の見直しにより、事業費の増加には至らなかったものと伺っている。

このため、補助金額に変更はなかったものである。

Q 2 建築資材の需要が高まっているのであれば、資材価格が高騰し、事業費が増加するのが一般的だと思うが、今回はその影響はないのか。

A 2 施行者は、事業開始前から建築資材の高騰に関する状況などは予測しており、そのリスクを踏まえ、一定程度の対応ができるよう事業を進めてきている。

施行者とは随時状況を確認しているが、現段階では事業費をさらに上げなければ事業実施できない状況ではないと伺っている。

Q 3 今回のスケジュール変更により、再開発の事業費や補助金の額に影響が出ないようになったことは一応理解するが、今後、更なる建設資材需要の高まりによって、建設資材価格がさらに上がり、再開発事業の事業費を増加せざるを得なくなった場合、これまでの答弁を踏まえれば、市の補助額も上がると考えるがどうなのか。

A 3 これまでも申し上げてきたところではあるが市としては、施行者都合による仕様の変更などに伴う事業費増について対応することは考えていないが、資材価格の上昇といった、施行者の都合によらない要因で事業費が大幅に増加し、施行者からの事業費の増加に伴う補助金の増額要請があった場合は、市としても北海道が公表している労務単価や資材単価の変動状況などを確認し、施行者との協議を行った上で、やむなく補助金額を変更することはあり得るものと考えている。

Q 4 第一種市街地再開発事業として、全体の工程を含めて事業認可されていると思うが、工事が後ろに延びることによって、国からの補助に影響は生じないのか。また、事業に関する変更手続きはどうなるのか。

A 4 国や北海道には、事業期間の変更の可能性を報告したところであるが、このことをもって後年次における内示額に影響を及ぼすものではないと捉えている。

なお、スケジュールの変更に伴い、事業計画や権利変換計画の記載内容にも影響を及ぼすことが考えられるため、施行者においてはスケジュールが定まった後に、北海道と協議の上、必要な手続きを行うものと認識している。

Q 5 これまで、この再開発事業に関して、中心市街地活性化協議会においても当初のスケジュールを示していると思うが、こうした場への変更説明はどうするのか。

A 5 これまでも、中心市街地活性化協議会においては、西3・9再開発事業に関する説明や意見聴取を適宜行い、様々な意見をいただいているところ。

今回のスケジュール変更等の件についても、今後開催される協議会の場において説明を行いたいと考えている。

Q 6 事業年度が延びるということは、この西3・9市街地再開発事業の効果についても変わるということなのか。

A 6 建設工事などによる経済波及効果と新たな雇用については、総事業費である約103.6億円が、地元企業への工事発注等によって生まれる効果であり、その効果が延べ4年間から5年間に延びることになるが、その効果に変わりはない。

中心市街地の居住者数、増加居住者による消費、歩行者通行量、固定資産税については、建物の完成時期に応じて効果が現れる時期は変わるものの、完成後の効果については変わらない。

Q 7 新しい店舗棟の1Fには、バス利用者のためのスペースが設置される予定と聞いている。このスペースの設置は、冬場にバス待ちをする人たちの環境改善が図られるなど期待も大きいと思うが、今回のスケジュール変更による影響はあるのか。

A 7 店舗棟の完成に合わせて待合スペースの利用が可能となるため、1年程度供用が遅れることとなり、完成までは現在のバス停をご利用いただくこととなる。

Q 8 本年度の国庫補助金の内示額が予算を下回ったことにより、一部の事業が後倒しになった経過を踏まえれば、来年度以降も内示額が予算を下回り、工事がさらに遅れていく可能性は否定できない。こうしたことによって、さらに工事が遅れる可能性があることについて、市としてどのように考えているのか。

A 8 傾向として、国の内示額が事業の完了に近づくにつれ、要求に対する交付割合が増加する傾向にあるものの、来年度についても要求に対して満額の内示がある保証はないものであり、来年度以降の工事を後送りせざるを得ない可能性があるものと認識している。

施行者は、国の補助を活用して実施する事業である以上、内示額に合わせて事業を進める方向で当初から事業を実施しており、市としてもその方向性については理解をしている。

Q 9 この種の補助金は、通常、秋と冬に追加配当の希望調査があると聞いている。市と工事施工者の考えと対応は。

A 9 他地区の事業において、遅れ等が発生し、内示を受けた国の予算に残余が発生することが見込まれた場合、追加配当の希望調査が行われるものであり、施行者としては、追加配当があれば配当を受けたいとの意向を以前より示している。

市としては要望調査があった時点で、施行者と協議を行い、事業の進捗度合いを確認した上で検討したいと考えている。

#### 4 「帯広市バイオマス活用推進計画」及び

#### 「十勝バイオマス産業都市構想」の中間評価について

##### 【帯広市バイオマス活用推進計画】関係

Q 1 報告があったようにバイオマス全体の合計では利用率は93.8%と計画策定時の目標を超え順調に進んでいると感じる。一方、個別に分類してみると増えたもの、減ったもの、進んでいるもの、進んでいないものが見えてくる。

廃棄系バイオマスの利用率は95.4%と既に目標値を超えているものの、未利用系バイオマスの利用率は最終目標値どころか計画がスタートした時点より下回っている。それぞれ

の要因をどのように捉えているのか伺う。

- A 1 廃棄系バイオマスについては、廃食用油に利用が目標どおりに進んでいないものの、賦存量の8割近くを占める家畜ふん尿が、堆肥として地域内で利用されていることが利用率を高めた要因としてとらえている。一方、未利用系バイオマスにつきましては、先ほど室長からの報告でも一部触れておりましたように、農作物の有効活用として事業が進んでいたバイオエタノール製造におきまして、余剰甜菜、規格外小麦が発生しなかったことにより、バイオエタノールの製造中止から製造会社の解散に至り、集計に反映されなかったことが、計画策定時の利用率をも下回る要因であると捉えている。

Q 2 家畜ふん尿の賦存量が大幅に増加している。その理由は何なのか。

また、現状の利活用は堆肥化がほとんどだと思うが、利用率を更に高めていくためバイオマス発電というものがある。バイオガスプラント整備に向けた市の考えと課題は何なのか伺う。

- A 2 家畜において、主に肉用牛の飼養頭数が増えているため、ふん尿の賦存量が増えたもの。一方、酪農業は、急速に規模拡大しているため、飼養管理方法が変化し、従来の家畜ふん尿の処理から、家畜ふん尿を原料とする液肥（消化液）や電気、再生敷料などの副産物を生産するバイオガスプラントは有効な手法であると考えます。課題としては、施設整備、ランニングコストが高額となっており、事業開始時の資金確保が必要であること。また、液肥が畑作農家で有効活用されるよう、関係する事業者が連携し、原料生産から収集・運搬、製造・利用まで、一体的な地域循環のシステムを構築していくことが必要となっている。

Q 3 家畜ふん尿の利活用に関し、計画の中では、「家畜農家の労働力やコスト低減を図るため、製造技術や手法の調査研究を進め、実用化をめざす」としているが、具体的に何をどのように期間中進めてきたのか伺う。

- A 3 農政部では、畜産農家における家畜ふん尿の堆肥製造では、発酵を促進し良質の堆肥とするため、重機などでの攪拌（切り替えし）が必要であるが、これにかかる労力の削減を図るため、切り替えしを必要としない嫌気発酵による堆肥化の実証試験を実施してきた。（H24～H26）

現在は、高度施肥設計確立・検証事業として、堆肥の肥効について、麦稈堆肥とバーク堆肥の種類や熟成度、土壌の種類などによって肥効率や減肥量が異なることから、堆肥の肥効分析の方法に基づき、圃場試験において作物の生育・収量を調査し、施肥効果についての実証試験を実施し、良質堆肥の域内循環の取組を進めていると伺っている。（H27～H30）

Q 4 未利用農産物の燃料利用（バイオエタノール）に関し、清水町で操業していたバイオエタノール製造工場が解散したことに伴い、こうした結果になったことは理解した。計画策定時のことを今さら言っても始まらないが、実際予定していた余剰甜菜や規格外の小麦はなぜ発生しなかったのか。また、エタノールを活用したE10燃料や高濃度燃料（ED95）の活用は、今後どう考えているのか。

- A 4 甜菜については、天候により不作の年があったことや、作付面積が減少傾向にあったことなどから余剰分が発生しなく、規格外小麦についても穀物価格の高騰などにより確保が

難しくなったもの。

E10燃料や高濃度燃料についても、バイオエタノールの製造工場が解散したことから、今後の活用は難しい状況となっている。

Q5 同じく未利用系のうち「麦かん・豆がら」に関して、これも賦存量そのものが計画に比べ大きく増えているが、これは作付面積が伸びているからだとして理解していいのか。また、利用率が計画策定時より下がっているが、その要因と今後、どのようにして計画に近づけようとしているのか伺う。

A5 麦かん、豆がらともに収穫量が増えたことにより、賦存量が増加したものの、麦かんについては、家畜の敷料として活用された後、堆肥として全量が利用されているが、豆がらについては、包括連携している企業において機能性素材の試験等を行っているものの、現状として、豆がらの多くが畑にすきこまれているなどしており、実績無しと集計していることから、麦かんと合わせた全体の利用率が減少したもの。

今後は豆がらの利用方法などについて、関係機関と協議しながら、利用率の向上について検討を図りたい。

Q6 食品加工残さについて、賦存量そのものが減少しているが、その要因はどのようなものなのか。また、計画では「地域内で循環再利用がなされていない残さの利活用の取り組みを支援する」としているが、具体的にどのようなことにしたのか伺う。

A6 食品加工残さについては、各企業の環境意識の高まりにより、加工残さが減ったものと考えられる。残さの利活用については、市内で産業廃棄物処理業者によりバイオガスプラントが整備され、事業系廃棄物のエネルギー利用が図られている。

Q7 今回は中間評価であり、今後はこれらを踏まえ、課題を整理し、必要があれば計画を変更していくことと思うが、どのように見直していこうとしているのか、現時点での考え方について伺う。

A7 今後の計画見直しについては、一部の事業では今後の取り組みが難しいものがあるものの、より実効性の高い計画となるよう、家畜頭数や家庭生ごみ、作物の作付面積の動向など様々な観点と、関係機関との協議も踏まえながら、見直しを図っていきたい。

#### 【十勝バイオマス産業都市構想】関係

Q1 バイオマスの利用率について、各種別を見ると最終目標値に対する現時点での達成状況に大きな開きがある。汚泥類を見ると賦存量そのものが減少していることもあり、既に目標値を大幅に上回っているものがある一方で、木質系については目標値には程遠い現状となっているし、農業残さは計画スタート時より利用率が下がっている。

プロジェクトごとの進捗状況については記載があるが、こうしたバイオマス資源ごとによる差をどのように捉え、どのようにして目標数値に近づけていこうと考えているのか伺う。

A1 バイオマスの利活用については、全体的には概ね順調に推移しているものの、ご指摘のとおり、個別のバイオマス資源別については、利用率が下がっているものや、全体に比べ、あまり上がっていないものもある。

今後は、課題や配慮すべき事項を十分踏まえたうえで、バイオマス資源ごとの現状の把握と動向について調査し、2022年度の賦存量や利用量について、帯広市同様、実効性の高い計画となるような取組や見直しについて検討したい。

**Q2 エネルギー自給率の関係について伺う。太陽光発電は既に目標値を達成しているが、その背景には固定価格買取制度（FIT）があると思う。しかし、買取価格が右肩下がりとなっているなど先行きの見通しが不透明となっている中で、これ以上の新規参入は難しくなっているのが現状だと思う。今後の見通しと推進に向けた考え方を伺う。**

A2 太陽光発電については、買取価格の低下とともに、電気系統の連系調整が難しくなっていることにより、導入台数への影響も懸念されることから、今後は、買取価格などを注視していくとともに、蓄電池の開発・設置による電気の自家消費の可能性など売電以外の方法についても情報収集や検討を図り、再生可能エネルギーの普及が滞ることのないよう取組を進めていきたい。

**Q3 次に水力発電について、ここに記載されている数値に貢献しているのは大規模な水力発電だと思うが、今後の可能性については、小水力発電が有力視されていると思う。現状どうなっているのか伺う。また、目標達成に向けて、どのような取り組みを進めようとしているのか併せて伺う。**

A3 水力発電は十勝で発電される再生可能エネルギーでは最も比率が高く、2022年度時点でのエネルギー自給率の目標を達成するためには、水力発電の全体の推進は不可欠であり、大規模水力発電所においても老朽化した発電所の更新を計画されている。

一方、小水力発電施設については、平成28年の台風被害により稼働を断念したのものもあるが、本構想策定後に整備された1基を含め十勝管内で2基の発電機が稼働している。

今後は、現在の施設が安定的に維持・運用できるよう、関係機関との連携を図っていきたい。

**Q4 バイオマス資源の利活用やエネルギー自給率の一覧があるが、これは十勝全体のものだと思う。その内、帯広市が占めている割合はどの程度なのか。分かれば教えてほしい。**

A4 十勝で利活用されているバイオマス約615万tのうち、8.8%にあたる61万tが帯広市内で利活用されている。内訳としては食品廃棄物が76.0%、次いで紙類が67.7%都市型の廃棄系バイオマスで高い寄与率となっている。

最も寄与率が低いものは家畜排せつ物の6.9%ですが、帯広市内の牛の飼養頭数が十勝全体の6%ということ踏まえると十分な活用状況と考えている。

エネルギー自給率は十勝の発電量170万Mwhのうち、4.7%にあたる8万Mwhが帯広市内で発電され、市内には水力発電所はないものの、発電種類別の寄与度では太陽光発電量が十勝全体の27.0%、くりりんセンターを含めたバイオガス発電では57.5%となっている。

**Q5 中間評価においては、バイオマスの種類ごとの5年経過時点での進捗状況を示すとなっているが、バイオマス産業都市構想は、バイオマスを活用した産業施策によって、持続的な地域経済を確立し、個性と魅力ある地域社会の形成をめざすことも目的となっている。**

こうしたことから、計画期間内での最終的な経済効果や地域への波及効果が構想に盛り

込まれているが、中間評価の段階で、どのように評価しているのか。

A 5 バイオマスの利用量及び利用率やエネルギー自給率において順調に推移していることや、各プロジェクトについて一部を除き、大方、順調に進捗しているものと考えており、家畜頭数の増加による畜産振興をはじめ、投資誘発額が142億円、プラント事業を実施している地元事業者で雇用が増加していることなど、経済効果や地域への波及効果についても、順調に進んでいると考えている。

Q 6 最近、再生可能エネルギーに係る送電線の空き容量不足について報道されている。今後、十勝全体においてバイオマス発電を含めた再生可能エネルギーの普及にはFIT活用を含め、これらの課題解決が重要と思われるが、市の考えを伺いたい。

A 6 送電線の空き容量については、北海道電力から「道東エリアの送電系統において既設設備の有効活用策により最大限の申し込みを受けていることから更なる受け入れには大規模な工事が必要である」との説明を受けている。

より大規模化していく畜産農家にとって家畜ふん尿のエネルギー化が、帯広市のみならず、十勝全体の問題として、十勝町村会や経済界にとっても最重要課題となっている。

送電線の空き容量不足については、バイオガス発電だけではなく、再生可能エネルギー全体に影響するものとなっていることから、今後は北海道電力の検討状況や国の動向を注視していくとともに、地域全体で連携し、課題解決に向けた取り組みを進めていきたい。

## 5 帯広市産業振興ビジョンについて

Q 1 平成30年度当初予算において、主要事業として、平成32年度から平成41年度までを計画期間とする「次期帯広市産業振興ビジョンの策定」が挙げられていたが、現在の進捗について伺う。

A 1 平成21年に策定した現在の帯広市産業振興ビジョンは、計画期間が概ね10年とされていることから、昨年度から、次期ビジョンの策定に向けた取り組みを進めているところ。

昨年度は、地域の経済団体の意見なども参考にしながら、地元中小企業などで構成される第5期の帯広市産業振興会議を立ち上げ、帯広市中小企業振興基本条例施行10周年記念シンポジウムの開催などを通じて、次期ビジョン策定の機運を高めてきたところ。

さらに、今年度は、臨時の委員を加え、産業振興会議の中に、「経営基盤・人材」「ものづくり・販路拡大」「観光・交流」の3部会を設置し、具体的に議論を開始している。

一方、今後、地元中小企業の現状・課題などを探るために、アンケートによる産業経済実態調査を予定しており、産業振興会議での議論などに役立てる予定。

次期ビジョンの策定にあたっては、前回と同様、帯広市産業振興会議での議論などにより、地元中小企業のニーズをしっかりと把握しながら、丁寧に作業を進めていく。

Q 2 (ただ今の答弁を伺うと) ビジョン策定に向けて、産業振興会議の中に部会を設置するなど地元中小企業を中心に議論をする体制を整備したこと、また、地元中小企業の現状と課題を把握するため、産業経済実態調査の準備を進めているなど、一定程度進捗していることは理解した。

今年度、産業経済実態調査を実施するとのことであるが、調査の概要について伺う。



A 2 本調査については、現行ビジョンの中間見直しを検討していた平成25年度に行っており、今回、2回目の実施となる。

前回の調査では、業種・業態が偏らないよう市内約3,000社を抽出し、調査票を送付、3割弱の事業所から回答があった。

調査票は、人材の育成・確保、経営状況・課題、今後の事業計画、市の支援策などについて聞く内容となっており、多くの企業が人材の確保、後継者の育成などに苦労している状況などが明らかになったところ。

前回の調査は質問項目が42個と多く、回答率が伸び悩んだことから、今回の調査では、前回との比較ができるよう基本的な項目を残しつつ、企業への負担を考慮して、質問数をできるだけ絞り込むなど簡略化を図り、産業振興会議において、地元中小企業、支援機関のご意見などもいただいた上で、同程度約3,000社を対象に、来月実施する予定。

調査結果については、今年度中に取りまとめ、産業振興会議の議論の参考などにしていく。

Q 3 前回の調査結果との比較なども行いながら、今年度中に結果をとりまとめ、産業振興会議での議論等の参考にしていく考えについては理解した。

もちろん、今回のアンケート調査で全体の傾向をつかむことも重要であるが、企業訪問などにより、現状と課題をつぶさに聞き取ることも大切ではないかと考えている。市の見解を伺う。

A 3 産業振興にかかる施策を検討する際に、地元企業のニーズや課題の把握が大切と考えており、これまでも、日々の企業・関係団体の訪問などを通じていただく様々なご意見・要望をもとに、施策の充実・見直しを行ってきたところ。

今回の次期産業振興ビジョンの策定は、この先10年間の地域産業振興の方向性を整理する重要な取り組みであり、産業振興会議での議論を重視しつつも、産業経済実態調査により幅広く企業ニーズ等の把握が必要と考えたところ。

お話の通り、産業経済実態調査に回答した企業・関係団体を訪問することで、現状や課題などに係る回答の意図・真意などを聞き取ることが可能であることから、産業振興会議でのご意見などもいただきながら、企業・関係団体のヒアリングを検討してまいりたい。

Q 4 是非、企業・関係団体の訪問等により、現場の生の声を聞いて、地元中小企業の抱える課題などの整理を行っていただきたい。

現在のビジョンは、平成21年度に策定して、ほぼ10年が経過しているが、地元中小企業を取り巻く環境はどのように変化してきたと捉えているのか。

A 4 少子高齢化により人口減少が進行する中、国内市場の縮小や人材不足、設備老朽化などが顕在化しておきており、平成25年度に実施した産業経済実態調査においても、売上の減少やコストの増加をはじめ、高齢化による後継者不足などが課題として挙げられている。

また、近年、IOTやAIなど技術革新が急速に進んでおり、様々な業種・業態において、今後、この分野への対応が求められるものと認識している。

なお、来月開催する産業振興会議では、この10年間の社会経済の動向なども振り返りながら、各委員から、自社の現状と課題、今後の取り組みなどについてお話しいただき、意見交換をする予定となっている。

Q5 お話のとおり、社会・経済の環境が大きく変化している。こうした変化も踏まえて、この先10年間の産業振興の方向性を議論していただきたい。

最後に、策定に向けた今後のスケジュールについて伺う。

A5 今年度は、先ほどお答えしたとおり、産業経済実態調査の結果なども踏まえながら、産業振興会議の3つの部会を中心に議論を進め、次期ビジョンの基本的な方向性を整理していく予定。

その後、平成31年度中に、所管委員会でご議論をいただき、新総合計画の策定スケジュールとも整合性を図りながら、成案化してまいりたい。